

おめでとう Amalfi! 年間ポイントレース第5戦『天神祭奉納ヨットレース』を制す!



今季ツキに見放されかけていた Amalfi が漸く優勝を掴まれた。能ある Amalfi は爪を隠していたのであろうか。毎年梅雨明け前後に開催される天神祭奉納ヨットレース。例年、風には恵まれない大会であるが、今年も案の定と言うか、想定以上に風が弱く、運営は冷や汗をかきながらのレース開催となった。

そんな運営側の想いも知らずか、参加27艇の意気込は高く、スタートラインでの第一列確保の争いも熾烈となり、ゼネリコを2回繰り返すこととなった。スタート時刻には、マークタッチやプレスタートエリアの戻れないという状況の艇も見られたが、天は彼女らを見放さなかったようです。

さて、各艇さすがに頭を冷やされたか、3回目は全艇余裕をもつてのスタートとなった。

風は350°から5ノット弱であったが、スタート時刻の繰り下がりに合わせて西からの風が入り始めたか、アウター側有利となり、外来の軽量艇がスルスルと脚を伸ばされるレース開始となった。

運営艇からは最も遠くに位置した艇団であったので、スタート直後には目につかなかったが、よくよく見ると、何とそこにイタリア仕立ての一張羅のセールを纏った艇影が飛び込んできた。運営艇上でも「Amalfi や、Amalfi や!」と驚きの声が挙がる、常連の Constanze、EarlyBird を置き去りにした、見事なスタートダッシュであった。Amalfi は昨年、1位を複数回獲得するなど、着実に年間優勝を視界に捉えてきておられたが、今季はその意気込みが空回りしていたのか、3位1回とやや不振に陥られていた。

だが、天神様との相性が良いのか、スタートダッシュの後も粘り強い帆走を見せられ、着順でこそ Constanze、Calipuso に譲ったものの、修正では OHYC 年間ポイントレースを優勝で飾られた。眠れる獅子が起きたのか!! レース後のパーティー会場では「外人部隊を得ての勝利だ」と妬み、嫉み、僻み、やっかみの声も聞こえてはいたが、大会前にキチンと整備をし、人を集めて、やることはやった上での会心の勝利であろうと評したい。



また、第2位に OPUA が入られた。同艇も年間ポイントレースへの出場は少なくなっているが、こちらも大会前には一生懸命船底を磨いておられた光景が確認できており、こちらもその成果が出たと言えよう。

勿論、Constanze や Early Bird がサボっていたのではないことは記者も承知であり、今年は天神様が笑顔に向けた先に Amalfi と OPUA が居たということであろうか。当レースには最恵国待遇は無いことも明言しておきたい。



【お詫び】 OHYC 参加艇の内「奇魂」艇の画がありません。深く深くお詫び申し上げます。

最後に DNS と記された艇についても少し述べておきたい。レース委員会としても、スタート時には風が弱く、スタートを延期すべきという意見も強かった。そんな中敢えてスタートさせた責任もあり、DNS 艇を何とか救済出来ないものかと真剣に検討した。しかしながらクラブ内とは言え、コンプライアンスは必須であり、又、過去、DNS 艇や DNF 艇を救済した例も無かったので、規則に従って得点を付与させていただいた。どうかご了承いただきたい。



この DNS の影響もあったのか、年間ポイントの獲得状況においては、風雲急を告げる状況となってきた。現状、Constanze がトップを維持されてはいるが、Constanze から5点以内に Calipuso と Amalfi が急迫してきている。例年、Constanze は先行・逃げ切り型で大会をリードされていくが、今年はそうはなっていない。プレ年金軍団の宿命か、メンバーの体力、家庭事情が影を落としている、というのが裏に通じた評らしい。

今、大会は漸く折り返しを迎えたばかりである。変動する TCF がこの先どのように影響を及ぼしてくるかは予断を許さないとも言えよう。年間優勝艇に贈られる壺を狙う上位5艇にとっては大切な後半戦となりそうである。



最後になりましたが、本紙面をお借りして、ご協賛いただいた大阪天満宮様、大阪硝子様、大阪北港マリーナ様、JSAF 外洋内海様に厚くお礼申し上げます。大会は事故等もなく、盛会で終えることとなりました。ありがとうございました。

また、写真をご提供下さった梅本様、竹中様、このような記事に出来上がりました。ありがとうございました。

#### 【編集後記】

記者も久しぶりの投稿です。大会には外来艇も多かったのですが、本紙面では OHYC 会員艇に絞ってお届けしました。外来艇の奮闘につきましては、別途、掲載させていただきます。今しばらくおまちください。

また、大会成績も別途掲載していますので、そちらもご覧ください。

記者ジェームス・Uでした。